

2F 放送ジャーナリズムと映像コンテンツ制作を通じて学ぶ

金山 勉

学部時代は西洋史学専攻（アメリカ史ゼミ）。大学卒業後、テレビ局アナウンサー兼記者としてジャーナリズムの実践を経験。その後、渡米留学しコミュニケーション、マスコミ学について研究。アメリカのメディアやジャーナリズム、日本の放送メディアについての研究が中心。現在は地上テレビ放送のデジタル化政策について日米の事例を調査中。

1. 専門演習の目標

放送全般について理解を深めた上で、テレビ放送システムや放送ジャーナリズムについて考える。日本・米国の放送事業、および放送ジャーナリズムが抱える課題について取り上げ、その上で受講生自身が身の回りの社会的事象について、映像・音声を用いて問題意識を他者に発信することができるようになってもらう。以上のようなプロセスを通じて自分がメディア社会とどのように関わっているかを自覚できるようになってもらうことを目標とする。

2. 専門演習で扱う課題と内容

世界の放送システム（日本、米国、英国、韓国、中国など）について理解する。比較放送システム論を活用して、世界の国や地域において存在する放送システムについて調査し、加えて放送ジャーナリズムの側面に特に注目して考察してもらう。同時に、グローバル化する社会において、ますます重要性を増す地域コミュニティでのコミュニケーションについても注目し、コミュニティ・メディアの可能性を考えてみる。その前提として映像メディアコンテンツ制作を自らが手がけてみる。

3. 授業の進め方・内容

3回生前期：映像コンテンツ制作を通じた学びにより、メディア制作の中に潜む可能性やメディア自体の特性についての興味・関心を引き起こす。

3回生後期：前期の映像コンテンツ制作による実体験を理論と結びつける形で、放送システム論の観点から踏み込んで考えてみる。プロジェクト、個人発表、レポート提出が中心。

4回生前期：「卒業研究指導」にもとづき卒業論文またはそれに準ずる提案書の作成。

4回生後期：卒業研究成果物の執筆、またはプロジェクトの完成。

4. 必要とする知識

コア科目で取り上げられたメディア関係のポイント、加えて2年次に受講したメディア関連講義の内容について講義ノートに再度目を通すなどして確認しておくこと。

5. 関連する分野・科目・知識

放送、ジャーナリズム、国際コミュニケーション、テレビ制作や映像コンテンツ加工などに関する講義を履修していることがのぞましい。

6. テキスト・参考書・機材（受講生が標準的に持つもの）

専門演習のメンバーが確定した後に指定する。映像・音声収録、および編集加工作業があるため、放送関連機材に意欲的に触れてみようとする必要がある。

7. 独自に付加する選考方法

簡単な個人面接を実施する。

8. 受講生に望むこと

物事に対してフランクに疑問や興味を持って、これらに対しさまざまな方法で解き明かそうとする努力を惜しまないこと。授業外のサブ研究・制作活動にも時間を割くことが望まれる。